
とある白井黒子の兄

葛根

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある白井黒子の兄

【Nコード】

N3935Z

【作者名】

葛根

【あらすじ】

白井黒子の兄。

そいつが引き起こす話。

微工口、TSなど注意が必要。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

プロローグ（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

ブローグ

●

白井黒子には兄がいる。

白井紅太だ。

両親の頭を疑う。

兄、白井紅太は両親の名前の付け方に思う所があった。

白赤、白黒。苗字の頭と、名前の頭を合わせるとあら不思議。

ギャグか？

赤黒兄妹である。

白も含めると三色だ。

それがどうした。

俺の妹がこんなに可愛いわけがないの時期を通り過ぎ呼び方がお兄ちゃんからお兄様になっちゃった。

小5までは一緒に風呂に入ってくれたのに。

常盤台中学に入ったのが間違いであつたか。

奴はお嬢様ではない。

俺の妹だ。

超ラブリーである。

貧乳だけど。

レベル4になった時はちゃんとメールと電話くれた。

嬉しかったが追いつかれてしまった。

兄的に先んじていたモノが減るのは威厳が減るのと同じである。

まあ、まだ喧嘩では負けない気にいるし、実際兄妹喧嘩しても勝利した。

喧嘩といっても試合のようなもので、殺し合いではない。

こっちはボクシンググローブ付きで手加減してる。

何しろ妹を傷つけるなど兄のすることではない。

ジャッジメント
とはいえ、風紀委員になんぞ入ってしまったので、可愛い妹に傷が付かないように鍛えるという意味でよく喧嘩する。
喧嘩のあとは風呂だ。

レディーファーストで譲って覗くといつも、

『お兄様。死ね、ですの』

レベル4の空間移動テレポートで飛ばされる。

もしくは、石鹸かなんかが飛んでくる。

高校に入学した俺に対して扱い酷くね？

中学一年の妹に欲情しないわけないじゃない。

それでも俺の住んでいる第7学区の男子学生寮に来てくれるからその気がないわけでもあるまい。

家族だから宿泊許可じゃないし。

逆に常盤台中学の寮は家族でも許可などでないらしい。

まあ、宿泊はできなくても部屋に入る位は出来るらしい。

執拗に部屋の入室を断る妹で、調べて解ったことだ。

侵入しようと思えば出来る。

だが、目を付けられると厄介だ。

それに、風紀委員の兄ジャッジメントが不法侵入などしたら妹に迷惑が掛かる。

常盤台中学学生寮208号室に住んでいる所まで掴んだのだが、諦めた。

●
能力を使えば侵入は簡単だがそれはそれでバレた時の反動が大きくなるだけである。

高校入学で上条当麻に出会った。

俺はコイツを知っている。

そりゃそうさ。

なんたつて” 視て” きたからな。
フラグメーカーで不幸体質。
説教殴りやろうで大体あつてゐる。

イマジンプレイヤー
幻想殺しの持ち主

右手一本で全てを解決。お困りの方はツンツン頭の高校生にお声を
おかけください。
きつと何とかしてくれます。
そげぶで。

何故この高校に入ったかは常盤台中学が近いからである。
レベル4はこの学校の最高レベルらしい。

小萌先生が言つてたから間違いない。

それにしても小萌先生をリアルで見るとアレだ。

保護欲が湧くというか、心の奥底から湧き出る何かがある。
持ち上げたこともある。

涙目で怒られた。

青髪ピアスはかなり羨ましそうに悶えていた。

アレは人間として手遅れの部類に入る。

あらゆる女性を迎え入れる包容力の能力者だ。
たぶん。

『ボクあレッド君でもレッドちゃんでも受け入れるんよ?』

レッドは俺のあだ名である。紅太の紅の部分を英語にしたあだ名で
高校入学して一週間で定着してしまった。

あの言葉を聞いた時はマジで殴った。ギャグ補正で死ななかったの
が悔やまれる。

俺は真正銘男だ。

顔立ちは妹の黒子に似てるが。

アイツの前では二度と女体化しないと誓った。

レベル4。

ボディコントローラー

身体操作の紹介は自己紹介の際に説明したが、実演したら青髪に告られたのだ。

初対面同士なのに。

いやー、あの時のクラスの引き具合は思い出してもゾツとする。

俺に対してではなく青髪に対して引いた。

しかし、俺の能力でいじられる事がなく、むしろ保護されるようになったのはある意味青髪の功績である。

瘦躯気味であるが、こう見えても握力とか測定器を壊せるんだぜ。

体力測定で世界新記録とか言うレベルじゃない異次元の結果を出してしまった。

冗談みたいな数値で体育教師が困っていたが仕方のない事だ。

だって、能力使用OKというか使えて強制されたからやった。今は反省している。

ボディコントローラー

『身体操作って便利だにやー。女湯に入れるにやー』

土御門元春はシスコン軍曹だ。とにかくシスコン。

『レッドにも妹が?! それは義か? 実か?』

マジな顔でマジな口調だった。質問の内容はアホだった。

●

上条当麻の一級フラグ建築士には制裁を。

『ねえ、当麻あ。私、可愛い?』

『えーと、紅太は男! 男なんだよ男なんです三段活用! 頼むから女体化で俺を惑わさないでー! 色々反応しちゃう! だって俺、

男の子だもん！』

ボディコントロール
身体操作で巨乳、黒髪ロン毛の美女へ変化して、声帯をいじって声を色っぽく調整。そして、話しかければまんまと乗ってきた上条当麻。

葛藤していたが、視線は谷間に行っていた。

それ以来、女体化して上条当麻に対して性的ないたずらをするのが楽しくてしょうが無い。

セクシャルハラスメントである。

ん？

フラグなんて立ってねーよ。

いじり甲斐のある相手であるだけだ。

●

主人公

白井紅太

レベル：大能力者（レベル4）

ボディコントロール
能力：「身体操作」

● 肉体が変化する時、上条当麻は反応する——！！

プロローグ（後書き）

なんか始まった。レールガンの方メインです。

第一章 白井兄妹（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第一章 白井兄妹

●

白井黒子は焦っていた。

それは風紀委員としての活動ではなく、家族である兄に対してである。
ジャッジメント

自身の中学入学、兄の高校入学から3ヶ月近く顔を合わせていない。コレまでの人生で兄と顔を合わせていない期間としては最長期間である。

ジャッジメント
風紀委員で忙しいと言って合わなかった。

実際は違うのだ。

姉と慕う人物で忙しい。

しかし、兄には紹介もしていないし、これからも紹介するべきではない。

兄は私の事をかなり好いていると思う。

それは女性としてなのか、妹としてなのかは不明だが、兄が可愛い女の子好きなのは確実である。

それに、自分自身が崇拜していると言っても過言でもない相手があり、それを兄が見逃すわけもないのだ。

最悪、私とお姉様のどちらが好き？ と聞いてやろうか。

●

強者に目がないお姉様が私の兄に突っかかるに違いない。
レベル4とレベル5。

差はある。

しかし、自分の失態だ。

『黒子は兄妹とかいるの？ 私、一人っ子でさー』

『一人、不肖の兄がいますわ』

それに対して、

『へえー、お兄ちゃんかー。いいなあ。で？』

『で？』

実力は、

『不肖のと申しましたが、性格的な問題ですの。強さでいったら、私なんぞ足元にも及びませんわね』

ついつい、口を滑らせてしまった。

『黒子、ジャッジメント風紀委員なの？ お兄さんってジャッジメント風紀委員なの？』

『いえ、ただの高校生ですの。でも、そうですね。体術、護身術などの多くの事を教えて下さいました。もちろん、私に傷がつかないように手加減ありでしたけど。それでも私の全力をぶつけても歯が立たない憎たらしい相手ですわ』

誇らしいと思わないが、兄の事では舌が回る。

『レベルで追いついたのにお兄様には勝てませんですの。まあ、こちらの手札を知っているという面もありますけど、まだ一度も勝った事ありませんわね』

『ふーん。お兄さん強いんだあー。いいなあ。そういうの』

憧れ、ですか。

でも、目の上のたんこぶ。というか、幾ら努力して、血反吐を吐く

ような訓練をしても勝てない相手というのは腹ただしいものですよ？

そういった話をお姉様にしたのが失態だった。

写真を見せるだの。一度合わせてだの。

ぶっっちゃけ戦ってみたとかやめて欲しい。

白井黒子の思いとは裏腹に出会って欲しくない両名の邂逅は無常にも必須であつた。

●

暴漢達に囲まれていた少女。

その制服は常盤台中学の物である。

通りゆく人々は横目に、それでも良識のある人物は風紀委員ジャッジメントに連絡した。

だが、風紀委員ジャッジメントが到着する間もなく少女は救われる。

少女を囲んでいた暴漢達は現れた邪魔者に文句を垂れながら人気のない裏路地に移動したのだ。

少女はその面影に一瞬目を奪われた。

自分の知っている人に似ている。

次の瞬間には自分を囲んでいた暴漢達が倒れていた。

似ている人物を思い出そうと気を逸した一瞬の出来事である。

「は？」

ジャッジメント

「風紀委員ですの！　ってお姉様！　そいつから離れて下さいですの！」

御坂美琴の視線の先。

倒れる暴漢達を中心にいる人物とその先の奥にいる白井黒子の顔を見比べて理解した。

似ている兄妹だ。

間違っことのない顔の作りをしている。家族だなあ。それにしても黒子ったら兄をそいつ呼ばわりとは。

「……。通報にあつた路地裏に連れていかれた女性というのは誤報でしたのね」

「黒ちゃん！ 超久しぶり！ 元気してたよね？！ む？ 身長は数センチ伸びたね！」

黒子。お兄さんに黒ちゃんって呼ばれているんだ。

「お、お姉様、これは……って。のわああ」

消えた。お兄さんの方が。

いや、移動だ。

黒子に抱きついていたのだ。

後ろから抱きかかえるようにスキンシップしていた。

テレポーター
空間移動能力者？ 兄妹揃って同じ能力？

その認識を変えるものがある。

彼が居た足元。

コンクリートの地面に靴跡が刻まれていたのだ。

パラリと路地裏を作っている壁から破片が落ちた。

視線を合わせるとソコにも靴跡があつた。

つまりは、壁を使った高速の立体移動だ。

靴跡を追うと彼の居た足場、壁の側面、黒子の真後ろの壁に刻まれていて、それが移動の経路であると予測できた。

「ああ、黒ちゃん、黒ちゃん。可愛いねよー。よしよし」

「ち、ちよつと！ お兄様！ いい加減に、しろ！」

あ、切れた。

兄の姿が消えて、地面に叩きつけられる。
はずであったが、リバウンドだ。

ボールが地面に跳ねるようにお兄さんは跳ねた。
その上で、

「なんと破廉恥な下着！」

「こおんのおお！」

妹のパンツを叱咤する兄がいた。それを叱咤する妹もいた。
なんか新鮮な黒子の反応を見ているなあ。

●

「いつも妹がお世話になっています。御坂美琴さん」

「いえ、そんな事は……」

ファミレスだ。

黒子の仕事の処理が終わり、手近なファミレスで紹介された。

白井黒子の兄、白井紅太。

レベル4の身体操作である。
ボディコントロール

肉体強化から容姿まで変えられるという能力であり、その力の片鱗
は先程見た。

高校1年生で、レベル1から努力でレベル4にまでレベルアップし
たらしい。

自身と同じであり、親近感が湧く。

さつきみた光景が嘘のような礼儀正しい好青年。

それが御坂美琴が感じた印象である。

席は白井兄妹が正面におりその正面に私がいる。

顔を並べると本当に似ている。

高校の制服を来ていなければ姉妹と間違えそうだと思っるのは失礼だ

ろうか。

「ところで、あの時どうやったんですか？」

それは私を囲んだ暴漢達の始末の仕方。

「ん？ ああ、あれね。顎先をちよつとね。こう、当てて、脳震盪」

黒子の顎の先を兄である紅太さんの拳の先がゆつくりと少し掠める。あの一瞬で、5人を相手にそれをしたと言う。

「お兄様の最高スピードは肉眼では認識不可能なレベルですの。録画されたテープをコマ送りにしても腕が消えて見える程のスピード。相変わらず、でたらめですの。それが、ボディコントローラー身体操作の一端というのですから反則ですわ」

「へえ」

感心。

黒子が男を褒めるなど初めて見た。

認めているのだろう。兄の事を。

いいなあ。私も兄妹欲しかったなあ。

「あ、きたきた」

それはパフェであり、ケーキであり、とにかく甘いものであった。三人前はある。

それが全て紅太さんの注文したものであった。

「全く、お兄様の甘いもの好きも相変わらずですの」「いやさー。能力的にカロリー消費がね」

それは、

「羨ましい。身体操作ボディコントロールって考えてみたら女の敵ね。太らないし、思い通りの体型になれるし、顔も思い通りって何よ！ その羨ましい能力！」

素の自分が出てしまう、女性の羨む能力であつた。

●

羨むものは嫉妬。

欲するものは理想。

配点：（女の敵）

●

第一章 白井兄妹（後書き）

マンガとアニメを都合のいい様に話の軸に。

第二章 身体操作の兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第二章 身体操作の兄

●

レベル測定。

常盤台中学はお嬢様学校である。

在学条件の一つにレベル3以上である事が含まれているとんでもない学校だ。

白井黒子は自分のレベルが変わらずレベル4であることに少なからず落胆した。

精度は上がっている。記録も伸びている。
それでも到底敵わない兄。

そぐわない。兄がレベル4であることだ。
ジャッジメント

風紀委員に入り幾つかの事件を解決した。
相手の実力や能力の解析は出来る。

ならばこそ、兄の実力がおかしい。

同じレベル4でも相性や実力があり個々で変化する。

本当の実力を隠している可能性。

ないとは言いきれない。兄の手札は多い。

まだまだ隠している手札があるのは分かっている。

己が知る兄の能力は、その身体が消える程の高速移動術と容姿を変
える変態性、それに軟体生物並の柔軟性。

腕。30メートルは伸ばせるのを見たことがある。

容姿を変える。最後に見たのは小5。

一緒にお風呂に入るのが恥ずかしくなり、それを言ったら身体が女
の子になっていた。

それでも中身を知っているのですその後の一緒にお風呂は断るようにな
った。

高速移動の数値は秒速83・3メートルらしい。時速300キロで

ある。新幹線かとツツコんだ覚えがある。
高速移動は当時の数値で、今はどうなっているかわからない。

●

初春飾利と佐天涙子がいる。
約束があつた。

レベル5に会う。

常盤台中学のエース、御坂美琴に会える。

白井黒子の紹介だった。
だが、道中に遭遇した。

「あれ？ 紅太さん？」

「お、初春か、久しぶりだな。元氣そうだな。そっちの娘は初めましてだね。白井紅太だ。よろしく」

白井黒子の兄である白井紅太と初春飾利は知り合いである。

ジャッジメント

風紀委員に入る前に知り合い、友人となつた白井黒子。

その白井黒子に似ている兄が現れたのはいつだったか忘れてしまった。

何故なら気付けば白井黒子のそばに居たからだ。

レベル4。しかし、白井黒子が敵わないという。

学園都市のデータベース上でもレベル4。

ジャッジメント

一般人だ。だが、初春飾利は彼に風紀委員に入つて欲しかった。

それは今も変わりはない。

「あ、初春のクラスメイトの佐天涙子です」

「はい、よろしく。佐天さん」

別に呼び捨てでいいですよ、と佐天涙子が言っているのを見る。

思い出す。私の時も初めはさん付けだったなあ。

「所で、君。本当に初春と同年？」

それは私と佐天さんを見比べて紅太さんが問うた。

あー、そうですねーだ。色々佐太さんは発育がいいですからね。

「えっと、そうですね。初春とはどういった関係ですか？ 白井ってもしかして……」

「そう、初春の友人の兄。白井黒子の兄だ。これから黒ちゃんの所に行くけど、そっちもそう？」

「そうですね。もしかしてついに紅太さんも風紀委員^{ジャッジメント}入りを決意されたんですね」

兄妹揃えば心強い。
だが、

「まーた初春は言ってるな」

「兄妹揃ってレベル4なんですから、兄妹揃って風紀委員^{ジャッジメント}でもおかしくないですよ！」

断られるのは分かっている。

「へー、お兄さんレベル4なんですかー。すごいなあ。私なんてレベル0ですよ」

●

佐天涙子は好感を持った。

レベルが高い能力者は総じてレベルの低い相手を小馬鹿にする節が

ある。

だが、眼の前の相手はそうではなかった。

「そうか。頑張ってレベルアップしようね。俺は初めレベル1だったから努力次第では上、目指せるよ」

道中、講義を受ける事になった。

「自分だけの現実という基板がある。その上で自己を確立する事が大事だよ。それはね、自分を信じる力。初めからレベル0だからと言って諦めずに究極な自己中で、自分こそ最高、最強って暗示でもいい」

「それが、レベルアップの秘訣ですか……」

紅太さんの場合は、そうなるらしい。

だが、結果としてレベル4だ。

学校で教わるよりも現実的でわかりやすいと思う。

「いきなり50キロ走れって言われても無理だよな。ならまずは500メートルから走りだして、次は1キロ、その次は10キロって感じで段階的に訓練すれば……」

地道な訓練と鍛錬。

それがレベルアップに必要な事である。

湧き上がる感情。それは、尊敬だ。

親しみのある人だ。

その妹さんに興味が湧く。

だが、見た。

ファミレスで女の子同士が重なりあっている所を。

その二人が、白井黒子と御坂美琴であった。

御坂美琴さんも白井紅太さんも同じく良い人である。
価値観の変わる日だ。

お嬢様と思っていた相手はゲーセン行こうと言だし。
尊敬できる人の妹はアレだった。

●

人集り。クレープ屋は流行っていた。

最後のゲコ太ストリップを貰ったのは白井紅太であった。

女の子相手におごるといふのは男の使命らしい。

振り向けば膝から崩れて犬のような格好で落ち込んでいる御坂美琴
がいた。

いい形の尻だ。

「ストリップ、いる？」

「え？」

子供らしい趣味を持っていた。わかっていたがまるでゲコ太中毒だ
な。

「ありがとうございます」

三人のお礼と、

「ま、お兄様ですから、妹に貢ぐのは当たり前ですの」

一人の感謝であった。

それぞれのクレープは口を付けられていた。

「黒ちゃんのちよつと一口頂戴」

了解を得ずに食べる。

「ちよつとお兄様。つまみ食いですわよ」

慣れた反応。その代わりに俺のも一口食われた。

「初春のはどんな味かな」

「え？ あ、ちよつと」

初々しい反応。その代わりに俺のを差し出す。

「い、頂きます！」

一口食べられた。

「涙子のは、どんな味かなあ」

「あ、どうぞー」

微妙な反応。それでも、顔が赤かった。
その代わりに俺のを差し出す。

「あ、こつちも美味しいですね」

一口食べられた。

「美琴のはーつと」

「あ、ちよ、ちよつと待ったー！」

過敏な反応。だが、食う。

「はい」

差し出す。

「う、ううう」

唸りながらも食べた。顔が真っ赤である。

可愛い。黒子も同じ様に差し出したり美琴のを食べようとしていたが、防がれていた。

全員呼び捨てで良いらしい。そりゃ、年上だからな。そろそろか。

●

異変に気付いたのは初春飾利だ。

それは昼の銀行のシャッターが閉じているというだけの異変である。

「アレ？ あそこの銀行、昼間から何で防犯シャッター閉まってるんだろう？」

それを聞いた全員の視線が集まった瞬間。

轟音。

爆破音が響いた。

素早く反応したのは風紀委員の白井黒子と初春飾利であつた。
ジャッジメント

「初春！ アンチスキル 警備員への連絡と怪我人の有無を確認。急いでくださいな」

「は、はい！」

「黒子！」

御坂美琴が叫ぶが、

「お姉様と、お兄様は待機！ 学園都市の治安維持は私達、ジャッジメ風紀委員ントのお仕事！ 御行儀よくお待ちくださいな」

俺まで釘を刺された。

「黒ちゃん。行っておいで。危なくなったら——」

「それには及びませんわ」

●

三人の視線の向こう。白井黒子と銀行強盗がいる。
初春飾利は一般人の対処をしている。

取り残されて、待機を下された二人と無力な一人。

「腕を上げたなあ」

一人の銀行強盗は宙返りをして投げられ背中から地面に強打された。

「すごい」

「さすが、黒子ね」

佐天涙子と御坂美琴の感想である。
バイロキネシスト発火能力者か。あの程度なら楽勝だ。
心配事はあったが、杞憂だったか。

「男の子が一人足りないんです！」

それは初春飾利の相手の叫び声である。
忘れ物を取りにバスへ向かった少年がいない。

「初春飾利はココを頼む。涙子と美琴と俺でその子を探すぞ」

「はい」

「わかったわ、手分けして探しましょう」

美琴は一人。涙子は俺とペアで探す。

手短に、三人で分散して探したほうがよかったが、涙子は身を守る術がない。

という理由でペアになったのだ。

変化はあった。

それは犯人の一人が人質を取れずに一人で俺達に向かって車で轢き殺そうとしてきた事だ。

人質になるはずの少年はいち早く俺と涙子が確保した。

その隙に犯人の一人は車に向い、何を思ったかこちらに猛スピードで向かってきたのだ。

殺意のある車に涙子が動けず、また、守るように抱きしめた少年も動けなかった。

目の端で御坂美琴がレールガンを撃つ構えを見せたが、その射線上に俺達がいた事で撃てずにいた。

ならば、俺が前にでる。

「こ、紅太さん！」

誰かの悲鳴に近い叫び声があった。

激突する。誰もがそう思った。

だが、直前に、男の右手が振り上がり、

ボディコンテローラー

「身体操作、私の最強のお兄様ですの」

轟音。

そして、振り下ろされた右腕は車のフロント部分を大破させた。スピードの勢いで車体の後ろ側が持ち上がり、男の頭上を超えて回転する。

車体の背の部分から地面に落ち停止する。

その先に立つ男は無傷であった。

「ま、こんなもんだ」

佐天涙子の顔には驚愕の表情があり、それは取り巻きの見物人達も同じであった。

「す、すごい……」

●

子供を守った佐天涙子はお礼をもらっていた。

気恥ずかしいものだ。

それでも、嬉しいと思う。

レベル5の御坂美琴にも格好よかったと言われたし、白井紅太にもお礼と賛辞を貰った。

『身を呈して誰かを守るって事はなかなかできないことだよ。その事は能力の有無じゃなくて、人間として強いって思うよ。俺は』

正直、かなり嬉しかった。

御坂さんは見せ場を取られたと悔しがっていたが、それでもその目は獲物を見つけたような目だった。

黒子さんは怒っていた。

その相手は兄であって、そのやり取りは羨ましいものであった。

●

憧れと尊敬

その先に生まれるモノは何か

配点：（恋心）

●

第二章 身体操作の兄（後書き）

ルビが上手くいかない。とあるの独特の用語は困るぜ

第三章 主人公と兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第三章 主人公と兄

●

「当麻くん」

「げ、レッドさんじゃないですか」

とある日の事。

上条当麻の部屋には白井紅太が遊びに来ていた。

それも、女の格好で女体化している容姿で、誰もが振り向くような美女だ。

白井紅太の普段の髪の色は茶色であるが、今日は黒髪のロングであった。

上条当麻の反応を精査した結果。黒髪ロングのお姉さん系巨乳が弱いとわかった。

ならば、弱点属性で遊ぼうではないか。

胸元は開き、谷間が見える服に、短めのスカート。その下にはちゃんと女物の下着を穿いており、どう見ても女である。

それこそ街を歩けば誰もが振り向くような容姿であり、その娘を隣に歩けば嫉妬されるのは必須であった。

「あの、視線が怖いのは私の勘違いでしょうか？」

部屋から飛び出して街で買い物をする。

上条当麻の左腕には柔らかい刺激と良い匂いのする塊が当たっていた。

周りの男。羨ましい。けしからん。死ね。

その視線の先の上条当麻の心境は複雑であった。

こいつは男、コイツは男。

男だー！

はは、羨ましいか！ その羨ましそうな目で見ている奴！

中身は性悪な男だぞ！ でもな、オパ―イの感触とか、肉々しい体つきとか女の子そのものなんだぜ。

良い匂いするのは香水か。手が込んでいる。

いやいや、冷静になれ。上条当麻！

こいつは男なんだ。

ほら、女の子同士で仲がいいと手を繋いだり腕を組んで歩いたりするだろ。

今の状況はそれだ。

不幸の根源の右手。

女の子にモテたりしないし、あらゆる不幸が付いてまわるが、今の姿はどうだ？

客観的に見ればそれはカップルという言葉が当てはまるだろう。

青春してる。勝ち組だと高らかに誇れる。

そう、相手が本当に女の子だったらな。

いや、見た目は完璧な女の子だ。

だから、街を歩いている際の男からの嫉妬の視線が。

女の子達はなんであんな冴えない男にあんなキレイな女の子がという疑問の視線が振りかかるのだ。

かくいう今も、

「はい、あーん」

とクレープ屋で彼女が購入したクレープを差し出されており、その周りの人、特に男性からの視線は強くなる一方である。

客商売であるクレープ屋の兄ちゃんでも一瞬こいつに見とれたのを

見逃さなかった。

「あの、レッドさん？」

紅太はよく人の食べ物を欲しがる。

いるだろ？ それ一口ちよーだいつて言う奴。それだ。

あーんの前に、俺のクレープを一口食べた。その後、これだ。

あーんである。

乗るか反るか。

「なあに？ ”いつもみたい”に、口移しじゃないと嫌？」

ざわつと、周囲がざわついた気がした。

気のせいだ。気のせいにしてください。

不幸だー！

●

精神的に消耗した。

憧れの女の子からのあーんがアレほどの破壊力と羞恥心と精神力を使うとは思ひもなかった。

クレープの先。谷間とか見えるし、その顔は美人である。

だが、男だ。もう男でも……。いや、ダメダメ。その一線を超えちゃあ駄目！

不幸にも、周りから見れば幸福にしか見えない状況だったと思う。

街に出て僅か2時間。あつという間に過ぎ去る。

それは楽しいからだ。

もちろん、恋人同士のデート的なものではなく、友人同士の交流という意味である。

不幸体質を理解している友人はそれを最小限にする。

つまり、金銭は彼が持ち、食事の持ち運びや、道端のトラップに気を配り事前に知らせてくれるのである。
端から見ると亭主関白の男に従う女の姿であるが、それはいつもの事である。

鳥の糞が飛んでくれば、引き寄せてくれて回避。

バナナの皮が地面に転がっていれば彼が拾ってゴミ箱へ。

先ほどのクレープも彼が購入して彼が持ち運び、あーんされた。

あの発言は嘘だ。いつもみたいにという発言だ。

周りの反応と俺の反応を楽しんでいただけである。

それが、性悪の証なのだ。

だが、その性悪を打ち消す行為が俺のサポートのような動きである。
正直、有り難い。

本当、女の子だったら是非お付き合いを申し込みたい。

いや、むしろその先、いやいや、結婚を前提に。いやいやいや、諦める。こいつは男だ。

そして本当の地獄はここからだった。

セブンスミスト店内の一箇所。

女性物の下着を扱うランジェリーショップである。

そこにそぐわない人物。

男である上条当麻がいた。

当然、男である上条当麻は居心地が悪い。

だが、更衣室の中。

時折カーテンを開けて見せてくる。

「おわー！ 見えてるから！ 丸見えですよ！ レッドさん！」

ブラと下着のみの格好を見た。それは艶かしく、思春期の男子高校生には刺激の強いものである。
それを気にすることもなく、

「やつぱ当麻はこっちのブラがいいかな？」

その場でブラを取り外し、双山の頂と突起物まで丸見えのままに付け替える。

「ぶふああああ、見ちゃいましたよ。目視しちゃいましたよ。刮目しちゃいましたよ！」

「何やってんのよ！ アンタは！」

それはそうだ。

女性物下着の店でココは更衣室前だ。その先のカーテンは開かれており、中にはブラとパンツのみの女性がいる。

客観的に考えるなら俺がカーテンを開けて覗いたとも取れる。変質者である。それを咎めるビリビリ中学生は正しいと思う。

「ビリビリ中学生か、お前にはまだ早いだろ！ アレこそがお似合いという言葉にぴったりの人物ですよ」

指差す先は更衣室内である。

「こおんの、ド変態がああ！」

●

「所で当麻くん。この女、誰？ 浮気？」

さすがに御坂美琴も店内で暴れる事無く、上条当麻に対して腹部への打撃。

その後、バックドロップという荒業で事済んだ。

しかし、ランジェリーショップの横の通路で修羅場が生まれ始めていた。

「え？ いや、知り合いと言つか、付け狙われているというか」

「ストーカーねえ。まだ中学生じゃない」

「なんですつてえ！」

店内に響く程の声をあげる御坂美琴だったが、ココが公衆の面前であることを思い出して大人しくなる。

「と、とにかく。今こそ因縁の決着を……」

「ダメよ」

遮る様に言い放つ。

（当麻、話を合わせろ）

（り、了解であります）

小声で御坂美琴に聞こえない程度に上条当麻と会話した。

「なんでよ！ アンタには関係ないでしょ！？」

「あるわよ？ 私達、これから新しい下着を脱がす行為をしにホテルに行くんだから」

一瞬、御坂美琴が停止した。

だが、言葉の意味を知り、顔が真っ赤に染まる。

「な、なな何言ってるのよ」

「当然、ナニよ。ねえ、当麻くん。これから大人のお楽しみするんだからね？」

「そ、そうだ。残念だったな。ビリビリ中学生」

何故か上条当麻も顔が紅いが、

「じゃーねえ。さ、行きましょ」

上条当麻の腕を取ってその場を後にする。

その姿に御坂美琴は声を掛けられずいた。

他人の恋路を邪魔する程無粋でもなく、何よりこの後するであろうあの二人の行為を想像してしまい、戦うどころではなかったのだ。

とある日の上条当麻遊び

配点：（幸）

第三章 主人公と兄（後書き）

誤爆。

ホントは明日の昼更新分でした。

第四章 超電磁砲と兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第四章 超電磁砲と兄

●

御坂美琴と白井紅太は相對する。

人氣のない川縁に佇む二人。

事の始まりは、御坂美琴のメールであつた。

『会いたいから来て』

それに釣られたのが白井紅太であつた。

御坂美琴の性格を知つた上で、勘違いした。

告白か！

いや、決闘の申し込みでした。

「さて、告白かと思つて来てみれば色氣のない決闘の申し込みとはね」

「いやいや、紅太さん。あつて間もないですから告白とかないですよ」

決闘はありなのかよと突つ込みたい。

「んで？ 黒ちゃんには内緒で呼び出してまで何でよ？」

「ま、黒子も貴方の事疑つてた見たいだし、レベル4の割にはどうも強過ぎるって」

「それは黒ちゃんの勘違いだね」

黒子の手札を知り尽くしているからな。

「それでも、強いんでしょ？ 私、強い人に興味あるのよねえ」

ちよつとエロく聞こえた。

遅かれ早かれ戦う事になっていたんだろうな。

自制のないエロ女め。

「なら俺は弱いから、むしろ降伏ということで決着つけね？」

「はっ！ 馬鹿いつてんじゃないわよ」

バチツと帯電する音が聞こえる。

「ま、お嬢様には似つかわない言葉遣いだな。いいよ。遊んであげるからかかってきなさい」

「なあんですつてええ！」

バチバチツと帯電する。感情の読みやすい相手だ。

御坂美琴の前髪から角のように青白い火花が散る。

それは槍の雷で一直線で襲いかかってきた。

迸る青白い電撃の槍の先。

御坂美琴は確かに当たったと確信したのだ。

●

爆破音に砂塵。

地面が抉れて砂が舞う。

御坂美琴は驚愕するのだ。

背後に感じる。

「何をやったのよ？」

「聞くバカがいるのかよ。それに答えるバカもいるわけないだろ」

言われて戦闘中だったと思います。
振り向いて無傷の相手を確認した。
やっぱりとんでもないとこだわ。

学園都市で私と戦える相手なんてアイツ以外にいたとは思わなかった。

記憶を探る。以前見た高速移動だろう。

だが、光の速さで落ちる雷を目で見て避ける事が出来るのだろうか？
私の攻撃は落雷と同じスピードだ。

「考えながらも手を休めちゃあいけないよ？ 美琴ちゃん」

それは黒子に対するように兄が妹に説くような口調であった。

「ナメんじゃないわよ！」

自身を中心に360度範囲に放電する。

今度は当たったのを目視で確認したのだ。
しかし、

「なんていうか、勿体無いな」

「！ どうして？！ 確かに当たったはずよ！」

無傷であった。

そして右腕が振り上げれて、

「人間の限界を超えた一撃って見たことある？」

解答の前に私の足元に振り下ろされる。

轟音と震撃。

「え、あ、あ？　嘘？」

士だ。

尻餅について周囲を確認して理解する。

それは、隕石が落ちた後にできるクレーターである。

直径5メートル。深さ1メートル弱。

刻まれた痕跡は私と彼を地面の下に移動させるものであった。

●

種明かしをしよう。そう前置きをされた。

私達はあの場所から逃げた。

彼の一撃で学園都市では珍しい予測されない地震が起きたせいだ。

決闘場所から離れたファミレス。そこで夕飯を食べながらのことである。

ボディコントローラー

「絶縁体で防がれたわけね。身体操作ってそんな事もできるわけ？」

「黒ちゃんには内緒ね」

しかし、よく食べるなあ。三人前は食事をとっている紅太を見て呆れる。

どうも、能力の代償が使うと腹が減るらしい。

う、羨ましい。どれだけ食べても太らない。むしろ能力を使用すればカロリーを消費するという。

「でも、まあ、最後の1撃はなによ？　アレ、手榴弾以上の破壊力じゃない？」

「さあ？　測ったことないからわかんね」

「はあ？」

測定テストがあるはずだ。

高速移動と容姿の変態。それに怪力。

大能力者のレベル4とは軍隊において戦術的価値を得られる力が必要である。

その事を彼の説明で理解はできる。

「つまりは、高速移動で戦況をかき回したり、変態で仲間に分れ込んで暴れたり怪力で色々殴り倒したりという戦術的価値が認められたということだな」

事前に敵対する軍の司令の容姿がわかっていればそれに容姿を変えて味方に有利な戦況を作り出せる。

潜入と謀略が学園都市にレベル4として認められた価値だということだ。

だからこそ疑問に思うのは彼のレベルは正しいものではない。だが、その答えは単純であった。

「全力で戦えるのって30分が限度なんだよね。それを超えると栄養失調になって倒れる」

1人1秒で倒せるとして、1800人以上の軍隊を組めば彼は倒れる。

確実性を増すのなら3000人〜5000人で編成された軍隊を用意すればいい。

そうやって己自身を評価する。

「代償ね。私も使いすぎると電池切れで動けなくなるし」

納得出来無い事も多い。

されど、目の前の幸せそうな食事を取る光景は見ている私までも幸福にさせるのだ。

●

「あ？　お、お兄様とお姉様？」

それは偶然である。

ファミレスから常盤台中学の寮までの道のりで、白井黒子の先に見慣れた二人の姿があった。

「落ち着きなさい。白井黒子。あれは、きっと偶然道でお姉様に会ったお兄様が夜道を送るという名目で私に会いに寮付近まで来るというシスコン行為なはずですよ」

それでも焦燥感が湧き上がる。

兄か、御坂美琴か。

二人が男女の仲になり、結婚したら正式なお姉様の義理妹になれるのだ。

だが、それを良しと思えない。

話が飛躍し過ぎていますわね。

たかだか二人が偶然帰り道が同じになっているだけである。

ならば、今は二人の仲を進展させるのではなく、邪魔をする。

「おー、黒ちゃんだ」

抱きついた先はお姉様だった。

「いきなり抱きつくんじゃないわよ」

「ぐえっ」

首根っこを掴まれた。体重は重くない。だが、女の子一人を軽々と片手で持ち上げる兄。

「さっきソコで偶然美琴に会ってね、ついでに今日の見納めに黒ちやんに会いに行く所だったんだ」

ホツと心の焦燥感が消える。

やはり予測は正しかった。

そして、抱擁された。

「んー、これだ」

「ち、ちよつとお、お兄様！」

それはいつもの行為である。

狭い腕の中、膝打を決めようとしたが、

「はは、じゃーねー」

私とお姉様の後ろ5メートル程の所におり、手を振っていた。

「嵐のような人ね。まあ、良い人じゃない。妹思いの」

「それをシスコンっていうのですよ。お姉様」

●

超電磁砲と身体操作。

果たしてどちらが強いのか

配点：（勝負）

•

第四章 超電磁砲と兄（後書き）

熟読せずにサッと読んで楽しむことをお勧めします

第五章 無能力少女と兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第五章 無能力少女と兄

●

ファミレスだ。

学生対象にしているため商品の値段は安くてフリードリンクも豊富であり、料理も美味しいのだ。

初春飾利と佐天涙子の正面には白井紅太が座っていた。

それは白井紅太が割引券を持っていたので、それに便乗する形で二人は昼食を頂いたのだ。

偶然ではなく、二人の内一人。初春飾利が白井紅太の行動を監視力メラで追い、偶然を装ってばったり出会ってしまったという演出をした。

目的は勧誘である。

一方、佐天涙子は風紀委員^{ジャッジメント}に遊びに来ていた。

友人の黒い部分を垣間見たのだが、彼に会えるならいいかという理由で初春飾利に付いていったのだ。

「結局、いつになったら風紀委員^{ジャッジメント}に入ってくれるんですか？」

「やだよ」

佐天涙子は何度目かのやり取りにため息をつく。

意外に初春ってしつこいなあ。

「ところで涙子達の学校生活はどう？ 楽しい？」

あ、無視した。

初春とのやり取りの間も話しかけてくれるので、嬉しいのだが逃げて道に使われている気がする。

「え、ええ。まあ、まだまだレベル0ですけど。目標は目指せレベル1です」

アレ以来、地道に能力開発をしている。

その熱心さが教師に伝わったのか、褒められた。

『佐天さん。熱心でよろしい。心境の変化ですかね。いい？ あなた達の年齢は心と身体の成長期です。考え方が変われば一気に伸びる子もいますよ』

「それで良い。それと初春。ジャッジメント風紀委員には入らん。俺より美琴に声をかけてみればどうだ？」

初春の目が輝いていた。

あちゃー。御坂さん。頑張れ。

●

佐天涙子はいつい先程の事を思い出す。

ファミレスを後にした際に初春飾利はジャッジメント風紀委員からの呼び出しで不在になった。

本当はこのあと三人でセブンスミストでウィンドウショッピングをする予定であった。

それが二人きりのデートのようなモノになるとは思いもしなかったのだ。

紅太さんとは出会ってまだ間もないし、これも数度目の邂逅である。二人きりとなると初めてのことである。若干の緊張と期待と興奮が織り交ざる。

「さ、行こうかー」

衝撃が走る。

心の準備も無いまま手を握られた。

「え？ あ、はい」

その態度は慣れたものであり、容易に予測ができる。

妹の黒子さんとこんな感じなんだろうなあと。

それでも、嬉しいと思う。それにドキドキする。

「あ、あのー、慣れてますね。こういうの……」

自分でも驚く。口が滑った。人生初の自分の意思とは関係なく口が動いたのだ。

「ん？ ああ、手か。黒ちゃんといつのも感じだった。嫌なら放すよ」

手から力が抜けるのがわかる。

それを放してしまうことは相手の心を放してしまいそうであり、焦燥感が奔る。

だがら、思わず握る。自分から。

「い、いえ。ちょっとびっくりしただけです。是非このままでお願います!」

●

驚くことに、洋服や下着に詳しかった。

それは女性物である。選ぶのは男性である。
複雑な感情を持ったのは佐天涙子であった。

まあ、黒子さんの付き合いとかで詳しくなったと。

それでも、自分のバストサイズにぴったりのブラを出された時は驚いたと共に若干引いた。

ならば仕返しとばかりに女性物の洋服を私が選び渡して見るとなんの抵抗もなく、更衣室で着替えたのだ。

「うわー、かわいいです」

顔立ちが黒子さんに似ているとは思っていたが、女の子の格好をすると黒子さんの姉に見える。

それより、なんで女装になんの抵抗がないんですか？！

「黒ちゃんに良く着せ替え遊びさせられたからね」

●

次々に店内を回る。

時間を忘れるというのはこのことだろう。

気付いたら午後6時間際であった。

「まじーな。こりや警備員アンチスキルに見つかるとうるさいぞ」

「もうそんな時間ですか？！ ちょっとやばいかも」

それはバスの時間が終了してしまう事を示していた。

プレゼントされた服が荷物だ。それに歩いて帰るには遠い。

なによりスキルアウトが動き始める時間でもある。

「ああ、心配するなよ。送って行くから」
「え？ いいの？」

たった一日で随分と仲良くなったと思う。
言葉から敬語が消えたのは相手が必要ないと言ったからだ。

「ま、少し我慢しなよ？」
「うわっ！」

お姫様抱っこというやつだ。

「きゃー！」

次の瞬間には景色が高速に移り変わった。

自分の体重を気にする間もなく、文句を言う暇もなくただ驚いた。
車とか抜いてるんですけどー！！
うぎゃー。と、飛んだ。

交差点の信号機の上を飛び越えて着地。
衝撃もなく、速度も落ちなかった。

絶叫系の乗り物は苦手ではない。だが、これは叫ばずにはいられない。

「非常識ですー！」

●

ぐったりと言う言葉が今の自分にどれだけ似合うだろうかと思う。
だが、自分の部屋が見える所までの移動時間はわずか数分であった。

「楽しかったよー」

「最後のがなければ満点だった。いやー、あれはもう無しで」

ハハツと乾いた笑いで答えが来た。
そして、

「うんうん、じゃあまたな」

頭を撫でられた。

はあ、私は妹かなんかですか？

今日は紅太さんの事をよく知る日だった。

人をからかうのが好きな人だ。

女装が似合う人だ。

優しい人だ。

私の憧れる人だ。

そして、心を動かされる人だ。

「うん、じゃ、またね。紅太さん」

私の顔は赤いだろうか。

それでも言う。

「今日は楽しかったです。よかったらまた二人きりで遊んで下さい」
「おっけー」

俺、帰るわ。と短い言葉を残し、夕焼け空の中に飛んでいった。

●

親交と進展

少女が想うのは何か

配点：（満点）

●

第五章 無能力少女と兄（後書き）

本来、^{アンチスキル}警備員なのにスキルアウトになっていたのを修正。

第六章 日常生活の兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第六章 日常生活の兄

● バランスという物がある。

それは学校でも必要なものである。

上条当麻や土御門元春が所属するクラスははっきり言ってバカクラスである。

クラス総合のテスト評価然り、所属する人物たちも癖のある人物が多く所属するのだ。

その中に白井紅太もいる。

校長の策である。

苦肉の策であつた。

優秀な人物を果たして最下層とも言えるクラスに入れて良いものかと。

だが、入試試験の成績トップを入れてやっとプラスマイナスゼロなのだ。

教育者として、底辺の成績を収める人物達を一つのクラスに集めてそのクラスだけ見放すということはできなかったのだ。

優秀な成績を持つ人物がおればそれに刺激されて、勉強に励む者もいるだろう。

また、学業で不明な点があれば、先生に聞くよりも同級生に聞いて理解を得たほうが刺激になる。それに、色々な相談もできるのだ。学友同士で互いに高めあう事ができれば良いと思う。

そして、学業以外にも青春を楽しんで欲しい。

●

「小萌先生とはつまり、年上なのに年下で先生なのに幼女という矛盾を抱えた存在だ。身長135センチ、容姿は外見十二歳だが、実年齢は――」

「はい、白井ちゃん。ちょっと来てくださいですよーっ！」

笑顔に青筋を作り明らかに怒っている様子である。

月詠小萌。学園都市の七不思議に指定されている大人の女性だ。大人の女性だと言うには容姿は12歳程度であり、身長も低い。パツと見小学生高学年位にしか見えない。ヘタをすれば小学生低学年に見える。

どちらかと言うと、後者に見える人物が多いようである。

海外で大学を飛び級で卒業した教師という経歴はないのだ。

つまりは自分たち高1の年齢からプラス10歳以上は離れているはずである。

学園都市某一位には不老不死実験の被検体と揶揄^やされる事だけはある。

その幼い容姿で目に涙らしき物を溜めて上目づかいで睨まれるとうしてもこちらが悪いことをしている気になってしまうのだ。

「小萌先生、ごめんなさい。すいませんでした。許してください。もう年の事は言いません。いや、むしろ貴方のその容姿は愛でるべきものであり、決してその容姿についての追求など今後いたしません。

だからお願いです。その泣きそうな顔をやめて、俺とその容姿に疑問を抱いた上条当麻をお許してください」

「あれれ？ 上条さんもさりげなく悪者になってませんか？ なってますよね？！ すいません。ごめんなさい。

そこ！ 筆記用具を投げつけない！ 繊細な上条さんが傷つくですよ！？」

これが日常的な風景である。

フラグメーカーの上条当麻と自称優等生の白井紅太は成績の差は天と地の開きがあるが、友人としての付き合いは密接である。

「カミヤん。地雷を自ら踏むなって言っただけだよ」

●

愛玩奴隷上条当麻となったのは一体いつからだっただろう。

入学した頃の学生服が衣替えをした辺りだろうか。

夏服から見える下着だったり、生脚のその先に見える理想郷だったり、屈んだ時にクラスメイトの谷間に興奮してしまったり。

それら全ては黙っていれば分からないものを、土御門であったり、青髪が叫ぶものだから不幸なことに巻き込まれたのだ。

つけ込む隙があれば容赦なしに攻めてくるのが白井紅太であった。上条当麻は男にも色目を使うド変態である。同性愛者だ、と。

体育の着替え。

偶然に視線が白井紅太に行く。

ああ、コイツはやっぱり男なのか。

改めて確認したのが間違えであった。

それは青髪が普通に、

「いける！ いけるでえー！ 俺、普通に興奮できる。なあ、カミヤんもそう思うだろう」

同調を求めてきたのだ。

土御門以外にの男子が何故か胸と股間を押さえていた。

どこからかその事が女子に伝言されてそれ以降、上条当麻の格は底辺に落ちた。

●

とある日の放課後。

2つの陰が道路に伸びる。

夕暮れ時。

他愛もない光景だ。

それが兄妹の在り方である。

並んで歩く。歩幅はゆっくりとしたものである。

流れる風景。

「平和ですわね」

「そうだね」

それだけで通じる。

平和な時間。幸せな時間。

望むものがあるのだ。

女の子と呼べる年の少女はこれを守るために風紀委員^{ジャッジメント}として使命を果たしている。

一方、男はそれを見守るだけである。

同系の髪色に、血の繋がりを示す顔。

手を繋いでいる。客観的に見て仲の良い兄妹に見える。

事実、嫌がる素振りのない妹とそれに満足する兄がいる。

兄離れ出来無い妹ではなく、妹離れ出来無い兄なのだ。

兄妹という関係は死ぬまで続くだろう。

いつかは兄が離れていく。

それは絶対だ。

その時に私はどう思うのだろう。

奪われたと思うのか、やっと妹離れしたかと喜ぶのか。

その時が来るまでわからない。

空間移動能力を使える程の頭で持っても人の心というものはわ

からないのだ。

「じゃ、また明日な」

「ええ、それでは」

手が離れて温もりが消える。

ただのいつもの別れだ。

また明日。

頼んでもいないのに一緒に帰る事になるだろう。

それで、お姉様が気を使って先にどこかへ行ってしまう。

あら？ 結構おじやま虫ですね。

お兄様は放っておいても良いけど、お姉様は放っておけませんですね。

●
いつもの日常。
いつもの兄妹。

●
配点：（兄弟愛）

●

第六章 日常生活の兄（後書き）

にじファンのランキングに入っています。これも読んでくださっている皆様のおかげです。
改めて感謝。

第七章 虚空爆破事件と兄 前編（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第七章 虚空爆破事件と兄 前編

●

夏。

自販機の前で二人の少女は話す。

「また例の事件？」

自販機で購入した缶ジュースを飲む。

変わったラベルだが、御坂美琴はこの缶ジュースが気に入っていた。

「これで五件目ですの。例によって爆発そのものは小規模で怪我人は無し、けれど——」

対して報告の様に語るのは白井黒子である。

「愉快犯にしてもあんまり笑えないわね。で？ 犯人の目星は？」

「昨日、ようやく手掛かりが掴めましたの。お姉様、重力子^{グラビトン}ってご存知ですか？」

記憶を探り思いだすように言う。

「重力子の事だっけ？」

「どのケースも爆発の直前に重力子の急激な加速が衛生によって観測されていましたの。アルミを起点に重力子の速度を爆発的に加速させ、一気に周囲に撒き散らす。つまりアルミを爆弾に変えていた、ということですね」

御坂美琴はそれならデータバンクで調べて犯人はすぐ捕まるなあと
思った。

それを口にしたのだが、

「該当する能力者はずっと入院していてアリバイがありますの。一
連の事件を起こすのは不可能ですわ」

どうやら苦勞しているらしい。

ならば、その犯人を見つけようではないか。

そして、相手次第で腕試しでもしてやるか。

だが、心を読まれたかのように釘を刺された。

事件を解決するのも学園都市の治安維持活動と平和を守るのは風紀
委員の仕事だと。
そして、

「スカートの中に短パンを穿かない！」

「それは関係無いでしょうが！」

常盤台のエースとしての己を振り返れ、女らしくしろと言われた。
余計なお世話よ！

●

とあるコンビニで爆破事件が起こった。

それが、威力、範囲を拡大し、場所も時間も関連性が認められず手
掛かりがない連続虚空爆破事件の始まりであつた。
グラビトン

●

爆破事件から一週間後。

ジャッジメント

風紀委員の第一七七支部所属に訪れた男がいた。

ジャッジメント

支部に居たのは訪れた男の妹は風紀委員に所属していた。

「場所も時間も関連性がなくて、遺留品を^{サイコメトリー}読心能力で調べても何もでない。その上に風紀委員^{ジャッジメント}の同僚が9人負傷している。手掛かりが

なくて困った果てに兄に頼る妹が可愛くて仕方ありません」

「そついうのはいいですから、何かありませんの？」

白井黒子はこの事件の手掛かりのなさに忙殺されていた。

遺留品を調べても、現場を調べても何も手掛かりがない。

新しい発見もなく、知恵も出したがそれでも何の手掛かりも掴めない。
い。

ジャッジメント

ならば、風紀委員ではない人物に相談することで何か新しい考え方が発見できるかもしれないと思い兄を呼び出して相談して見たのだ。疲れて思考がおかしくなっていたのかもしれないと後悔した。

「黒ちゃん。短期間で急激に力を付けた能力者の犯行かもって言うたね」

それは可能性の問題である。

「それ、合ってると思うよ」

何故かというと、

「場所、時間の関係性は無視して、能力の威力測定。段階的に強くなっているね。だから犯人は喜んでいるんだね。自分の能力に。そ^{ジャッジメント}んで、一週間前の風紀委員に被害があつた事件から、被害者が風紀委員^{ジャッジメント}になつてるね。目的がどこかで移行したんじゃない？ いや、初めから狙いは風紀委員^{ジャッジメント}だったのかも。少なからず、風紀委員の仕

事に不満がある人物が引き起こしていると考えたと繋がるね」

感心と驚き。そして、

「つまり、犯人の狙いは風紀委員^{ジャッジメント}?!」

結論が出る。

見計らったとうタイミングでそれは来た。

衛生が重力子の爆発的加速を観測したのだ。^{グラビトン}

その観測地点は――。

●

「へー、超電磁砲^{レールガン}ってゲームセンターのコインをとばしているんですか」

「そうよ。まあ、50メートルも飛んだら溶けちゃんだけどね」

セブンスミストで洋服を選びながらの会話である。

「必殺技があるとカッコイイですね」

本来は四人のはずであったが、誘ったルームメイトは仕事だと言って断られた。

随分と珍しいと思ったが、それだけ事件に切羽詰っているのだろうと思う。

結局、初春さんと佐天さんと私だけセブンスミストで買い物することになった。

「私もインパクトのある能力だったらいいなあ」

佐天さんの望みはわかる。

地道に能力開発訓練を始めていると聞いた。その時の顔は希望に満ちていた。

きっと良い能力者になると思う。

「初春、こんなものじゃ?」

初春さんに見せたのは紐パンであった。

「はい?! 無理無理。無理です。そんなの穿けるわけないじゃないですか!」

「これならスカートめくられても堂々と周りに見せつけられるよ」

初春さん苦労してるなあ。

「御坂さんは何を探しに?」

唐突に話を振られた。

「あ、私はパジャマとかね」

「それならこっちの方に……」

先行して初春さんがパジャマのあるコーナーに向かう。

展示品のパジャマ。

これ、可愛いなあ。

「アハハ、見てよ。これ。こんな子どもっぽい小学生くらいまで来てたよねえ」

「そうですねえ。小学生くらいまではこういうの着てましたよ」

い、いいもん。どうせパジャマだし。他人に見せる訳じゃないモノじゃない。

だから、小学生が着ようと私が着ようと可愛いものなのだからいいじゃない。

二人は別の服を見ている。

今の際に……。

合わせる！

「何やってんだ。オマエ？」

●

幼女の頼みは洋服店を探しているということで、紳士たる上条当麻は嫌な顔一つせずに案内した。

セブンスミストだ。

そこで、会いたくない人物が鏡に向かってコソコソと何かしていたので声をかけた。

変質者め。

「な、な、何でアンタがこんな所にいるんのよっ！」

「いちゃいけないのかよ」

公共の場であり、洋服店だぞ。俺だって服くらい買う権利はあるはずだ。

「おにーちゃん」

幼女だ。お兄ちゃんと呼ばれるのは悪くない気分だ。

あー、癒される。

「アンタ、妹いたの？」

「いや、俺はこの子が洋服店探しているって言うから案内したただぞ」

クラスの外道どもに見つかったら通報物だ。

「今こそ因縁の決着を今ここで……」

駄目だこいつ。早く何とかしないと。

事あるごとに因縁を付けてきて暴力を振るってくる相手だ。

「オマエの頭ん中にはそれしかないのかよ。大体、こんな子供の前で始めるつもりかよ。それにココじゃまずいだろ。文句があるならすぐに視界から消えるよ。さー、行こうか」

「うん、お兄ちゃん！ じゃあねー。お姉ちゃん」

天使の加護を得た。ビリビリとの対決を回避したぞ。

●

能力の上達を確認。

望みは破壊と創造。

配点：（爆弾魔）

●

第八章 虚空爆破事件と兄 後編（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第八章 虚空爆破事件と兄 後編

●
街を疾走する中、白井黒子は同僚の安否と先に飛び出した兄を想う。第一七七支部を出発する前に同僚である初春飾利に事件の続報を知らせた。

偶然、観測地点であるセブンスミストにいたのだ。

知らせたはいいが、重大な要件である事を伝える前に避難誘導を開始すると言って電話を切られた。

「今回のターゲットは初春だと言っのに！」

テレポート
空間移動を使い全力で現場に向かう。

「お兄様も、黒ちゃんの友達に万が一があつたら悲しむだろう。とか言い残して飛び出すし。全く自分勝手すぎますわ！」

●
居合わせた御坂美琴に協力を仰ぎ、セブンスミスト店内の一般市民の避難は滞り無くすんだ。
店側の協力もあり、爆弾が配置されている事を悟られないように店内放送で電気系統のトラブルという名目で避難させた。
パニックは避けられた。あとは、肝心の爆弾を探しだすことだ。
とりあえず、避難終了を報告するために白井黒子に連絡をとる。

「全員避難終わりました」

「初春！ 今すぐそこを離れなさい！」

悲鳴にも近い通話音に驚く。

「過去の事件全てで風紀委員ジャッジメントが負傷していますの！ 犯人の真の狙いは、観測地点周辺にいる風紀委員ジャッジメント！ つまり今回のターゲットはあなたですよ！ 初春！」

「え?!」

●

セブンスミスト周辺の人集りに上条当麻はいた。

せっかく幼女と戯れていたのに店内放送で本日終了のお知らせが届いたのだ。

不幸だ。

「あれ？ あの子。どこだ？」

はぐれた。自分に付いてきているとばかり思っていたのだが、人ごみの中、はぐれてしまったようだ。

そして人集りの中から誰かのつぶやきが聞こえたのだ。

「もしかして、さっきの放送って方便で、最近起きてる連続爆破事件じゃね？ 風紀委員ジャッジメントの娘もいたし、爆弾があるって知らせないのは店側のフラインプレーだね」

同時に、自分の不幸体質から最悪の結論が導かれる。

彼女はまだ店内にいる。さらに、爆弾の存在が事実だとすれば最悪だ。

そして、目に入って来たのは避難誘導を手伝っていたビリビリだ。

「ビリビリ。さっきの子、見なかったか？」

「は？ 一緒じゃなかったの？」

「外にいないんだ。もしかしてまだ店の中にいるのかも」

「なにやってんのよ！」

自分でもそう思う。しっかりと手を繋いで一緒に外に避難するべきだった。

横断歩道を挟んだ向こう側のセブンスミスト。

そちらに駆け出そうとしたその時、疾風と共に現れた人物がいた。

「到着～。ん？ 不幸の塊がいるな。ちょうどいい。来い！」

「紅太？！ 何だよいきなりっ？！」

普段の容姿では紅太と呼び、ソレ以外の容姿ではレッドと呼ぶ。

同一人物なのだが自分の中では別人として見ているため区別の仕方として呼び方を変えろという方法をとっているのだ。

「美琴も一緒か、不幸量産機の癖にピンポイントで役立つな」

「はあ？ 紅太さんとコイツが知り合い？ どういうこと？」

疑問を浮かべるビリビリだが、そんな場合ではない。

紅太の真剣な顔がそれを伝えている。

「美琴は事の詳細を知ってるな？ だったら外で犯人らしき人物を探せ。不幸は俺と来い」

「え？」

疑問の声がビリビリと重なる。

犯人という言葉からセブンスミストで爆弾事件が関わっていると理解できる。

そして、焦る。幼女が危ない。

「人助けに行くぞ」

その言葉で全て伝わる。

「おう！」

「ち、ちよつと?! 私も行くわよ！」

●

結局、御坂美琴は俺達に付いてきた。

話を聞かないやつだ。だが、助かったのは初春飾利と最後に別れたフロアの場所を覚えていた事だ。

二人を脇に抱えてエスカレーターを二足で登り切る。
そして、

「おねーちゃん」

子供の女の子が呼ぶ相手、初春飾利が居た。
女の子の手の中にはカエルの人形。

「メガネかけたおにーちゃんがおねーちゃんにわたしてって」
「よかった無事だったみたいだ」

抱えていたのを開放していた人物が俺の横で安堵した。
初春飾利もこちらに気付き何か言いたげであった。

だが、初春飾利は人形を女の子から受け取り投げ捨てる。

「逃げて下さい。アレが爆弾です！」

投げ捨てた人形から女の子を守るように初春飾利は女の子を抱く。
それを守るように御坂美琴が立つ。
更にその先に俺と上条当麻が並ぶ。
直線上に並ぶ。

人形が異形を始める。

「防げ無能」

「はは、少しは遠慮してもんを——」

上条当麻が俺より前に立ち構えて右手を差し出す。

●

轟音の後。

静けさが支配する空間で御坂美琴は目の前に居る両名を見る。

超電磁砲レールガンで爆発物ごと吹き飛ばそうとしてコインを取り出したのだ
が手から滑り落ちた。

間に合わないと思った。

その先にいた両名は普通であつた。

先頭のツンツン頭からU字を描くように私達の居る場所は爆発の被害を逃れていた。

●

「スバラシイぞ！ 僕の力だ！ 徐々に強い力を使いこなせるよう
になってきた！ あと少し数をこなせば、無能な風紀委員ジャッジメントもバカに
してきたアイツらもみんなまとめて殺せる！」

人気がない路地裏。

不意に肩に触れる感触に驚き振り返る。

「ガッ！ ゲフッ！」

衝撃。

そして痛み。

顔面を殴られたのだ。

「俺はさあ。お前がどんな被害を出そうとも知ったこっちゃないと思っていた。それこそオマエをバカにしてきた奴が死のうと関係のない話だからな」

「な、何を言っている？」

「でもなあ。無能な風紀委員だど？！
ジャッジメント ふざけんなよテメエ」

身体が浮く。

首元の服を掴まれて持ち上げられたのだ。

「ひっ」

恐怖だ。アイツらとは次元の違う明確な殺意を感じる。

「残念な事にテメエの目論見は外れた。死傷者どころか誰一人カスリ傷一つ負わなかったぞ」

「バカなっ！ 僕の最大出力だぞ？！」

いつもこうだ。

何をやっても上手くいかない。

力のある奴がム力つく。

僕をつかむ彼。

左手は僕を掴んでいる。もう一方の右手でビルの壁に手を当てて、

そのまま壁の一部を筆りとった。

「ああ……」

「昔はできなかったけど、努力して頑張ってレベルを上げた。^{ジャッ}風紀委員^{ジメント}だつて頑張ってるさ。それに、テメエみたいに楽しんでレベル上げしている奴に風紀委員^{ジャッジメント}がどうこう言われたかねえ！」

掌に収められた壁の一部が握撃で碎ける。

その光景を目に入れた。

そして、右手が僕の頭に添えられて、

「こ、殺さないで……」

懇願した。

「ま、もう一発くらいくらつとけ！」

拳骨だ。

それもあまり痛くない。

身体的なダメージはないのだが、何故か心にダメージが来た気がした。

●

「容疑者の少年が自首という形で確保されました」

「……。了解ですの」

先に到着しているはずの兄の姿はなく、負傷者無し。死傷者無し。

犯人は捕まる。^{ジャッジメント}

残る風紀委員の仕事は事後処理だ。

初春達がいた場所だけ全くの無傷。

一体、能力をどう使ったらこういう風になりますの？

疑問をぶつけるべき相手の兄に向かって思った。

初春は背を向けていたため結果としてお姉様がどうにかしたと思っているのだが、私は別の可能性を捨て切れていない。

何かしたに違いないのは兄だ。たぶん。

●

結局私は何もしていない。

実際に初春さん達を救ったのはアイツらだ。

「いいの？ 今名乗り出たらヒーローよ？」

爆破を防いだ人物と犯人を自首させた人物に声をかける。

「おい、不幸。なんかキレ気味に聞いてきてんぞ？」

「はあ。ビリビリ。みんな無事だったんだからそれで何の問題もないじゃんか。誰が助けたなんてどうでもいい事だろ」

なーに、カッコつけてんのよ。

「あのなあ。美琴。俺らはヒーローになりたいわけじゃない。ただ困っている人がいたから助けた。そこにお礼はあっても名誉はいらないんだよ」

「そーゆーこと」

お人好し。偽善者。

だんだん紅太さんの本性が見えてきた。
性悪……。

立ち去る二人を見送る形になった。

「スカしてんじゃないわよ！ 私にカッコつけてんじゃないわよ！
ムカつく！」

●

正義の味方かお人好しか。
事件は終焉を向かえた。

配点：（主人公達）

●

感想でも書いたもの。
シスコン早見表。

主人公はレベル4。

レベル0 無能。 感心がない。 落ちこぼれシスコン。

レベル1 低能。 会話が少ない。 メールのやり取りをする程度のシスコン。

レベル2 異能。 親しいが家族レベル。 買い物荷物もち程度のシスコン。

レベル3 強能。 休日と一緒に遊びに出かけれるレベルのシスコン。
エリートシスコン扱いされ始める。

レベル4 大能。 一緒にお風呂に入れるレベルのシスコン。 互いに
尊敬の価値が得られるシスコン。

レベル5 超能。 一線を超えちゃってるレベルのシスコン。 シスコ
ン軍曹とも呼ばれ肉体関係をほのめかす重度のシスコン。

第九章 後日談と先輩と兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第九章 後日談と先輩と兄

●

高校生としてエロ本は必須である。

また、エロに関した映像も。

そして、寮暮らしとはいえ、隠すのは男の性である。

シンプルな隠し場所はベッドの下。

少しひねって本棚に紛れ込ませる。

上級者はあえて隠さないなど。

そんな思春期の高校生男子上条当麻は令状のない家宅捜索に踏み切られていた。

クラスメイトで友人である人物。

白井紅太だ。

彼、というか今は彼女という呼び名が相応しい容姿である。

どこから仕入れてきたのか自分の学び舎の女子の制服であった。

「当麻くんはベッドの下か。年上系を学ぶ傾向があるね」

「やーめーろーよー。人の性癖をその容姿で口にしちゃだめです！」

ティーン雑誌のモデル並の容姿である。黒髪ロングに大きめのバスト。谷間を見せるように制服のボタンが外れており、スカートも短めで目のやり場に困る。

そんな彼女が自分のエロ本を持ってこれは何だと説明されるのはおかしい性癖の持ち主でなければ恥ずかしい思いをするだけである。

「ほら！」

「わー！ スカート思い切り捲り上げましたよこの人！」

発言とは裏腹にばっちり見ていた。

全く持つて何しにきたのだと問いたい。

「さて、言葉では否定してるけど身体が正直な当麻くん」

「なんだよ」

本題に入る気だと感じる。

「この前の爆弾事件の犯人は自首したと言ったがその後、事情聴取^{ジャッジメント}で風紀委員になりたいと言ったそうだ。何でもバカにしてきた風紀^{ジャツジメント}委員の事をよく知って出来るならば、自分と同じ境遇の人を助けた
いと言ったそうだ」

「……」

それは良いことを聞いたと思う。

曲がった性根がいい方向に向かったと思う。

「初めからそういった思考になれば良かったんだけどね。ま、あの
ヒヨロイ身体でどこまで訓練に耐えられるか分からないけど」

「台無し！ ちょっと良い感じだったのに！」

●

「犯人にも思う所があったんでしょね」

「それにしても、まさか風紀委員^{ジャツジメント}になりたいなんて言うとは思いませんでした」

白井黒子と初春飾利は事情聴取の報告を見て驚いた。

多くは無いが、事件を起こした犯人が逆の立場。つまり、風紀委員^{ジャツジメント}

になるという事例はある。

右の頬を腫らして、頭に小さなコブができていた犯人が自首するまでの間になにかあったのだと容易に推測できた。
お兄様かお姉様のどちらかが何かをしたと思う。
結局、事件が収束したのだが、お兄様はその日見つからなかった。
後日、事件に付いて聞いてみたが、

「気のいいヒーローが現れたんだよ。たぶん」

謎の証言を残していた。

答える気がないものに対して兄は絶対に答えない事を知っているの
で追求することはなかった。

事件後、ジャッジメント風紀委員で人事が行われた。

負傷者の補充と今後凶悪犯に対しても抵抗できるように人事配置が
されたのだ。

白井黒子の先輩に当たる固法美偉が第一七七支部に来ることになっ
たのだ。

研修などで世話になった人物である。

クレアポイアンスレベル3であり、透視能力を持つ彼女は年上でジャッジメント風紀委員の経験も豊
富だ。

力強い味方であるが、巨乳だ。

●

「へー。お兄さんがねえ」

固法美偉は事件の裏にあった経緯を後輩の白井黒子に聞いていた。
虚空爆破事件の真相を見抜いた人物。

面識はないのだが、何回か白井黒子から兄の話を聞いたことがあっ
た。

「その人、ジャッジメント風紀委員に興味とかないの？」

優秀な人物であるのなら引き込みたいと思う。
だが、

「まあ、初春が何回か誘っているようですが、その気はないようです。」

残念。

人それぞれだものね。

しかし、その洞察力には興味が湧く。

「貴方のお兄さんってどんな人？」

その質問に白井黒子は困ったような表情で答える。

「掴みづらい人物ですわね。昔から妙に落ち着いていましたし、頭も良かったですわね。その割に性悪な部分もありますし。初春が言うには理想の兄と言っていましたわ」

それでも、と前置きをして続ける。

「一緒にお風呂に入ろうとか、休日と一緒に出かけようとか、下着が薄いからどうかしなさいとか。口うるさい所もありますわね。客観的に見れば理想の兄かもしれませんが、兄妹としてはあまりシスコンなのもどうかと思いますわね」

「へ、へえ。だいぶ変わった人ね。過保護と言うか、ある意味妹想いね」

愛情があり過ぎるのもどうかと思う。

「まあ、一人の男性と見るのなら私でも一目おける人だと思いますわね。家族感情を抜きにして、お兄様は気が利くし優しいし、何より、強くて格好いいと思えますわ」

憧れだろうか。

家族を良く言うのは恥ずかしい面もあるはずだが、ハッキリと断言する辺り認めている部分もあるのだろう。

「お兄さんのこと好きなのねえ」

それは兄妹として。

だから固法美偉は白井黒子の微妙な表情をしている事に気づかない振りをした。

●

後日談と人事。

先輩と後輩。

家族愛と愛情。

配点：（先輩）

●

20万PV突破とこれまでの感謝（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

20万PV突破とこれまでの感謝

白井兄妹の日常

●

「これで見納めかあ」

感慨深い口調であるがそれを聞いている人物は不機嫌であった。

「お兄様。本当に、これで最後ですからね！」

白井黒子。当時彼女がまだ小学5年の時の話である。

よりにもよって両親は不在。

宿泊してくると連絡が入った。

兄曰く、妹か弟ができるかもねー。らしい。

それは嬉しい事だ。

その時の私はそれが正しく理解出来ない年齢だった為素直に喜んだのだ。

そして、夕食前の事である。

白井家では夕食前にお風呂に入るという習慣がある。

私が小学3年までは兄と一緒に風呂に入るのに抵抗がなかった。

だが小学4年になると恥ずかしくなってきた。

周りの女子も両親と一緒に風呂に入るのを止め始めており、まして、異性の父親や兄弟と入るのは殆どいなくなっていた。

私の両親達は、

『あらあら、仲がいいのねー』

と言っただけであった。

さすがに小学5年になって兄にこれで最後と告げたのだ。これが認められなければもう口を聞かないと言ったのが効いたらしい。

中学生にもなって小学生高学年の妹と一緒に風呂に入っているのは問題があると思う。

そろそろ兄の下半身を見るのが恥ずかしい。

顔とは裏腹なものが付いていた。

小象からスペースシャトルに変化する頃にはまともに見れなくなっていた。

私も胸が膨らみ始め女の子から女へと身体が変わりつつあったのだ。だからこそ、一緒にお風呂に入るといふ行為はもうお終いだ。むしろ遅すぎたほうだ。

『ならコレだったら恥ずかしく無いよね？』

女体化するのを初めて見た。

そこで確信する。

この兄は変だ。

そういう問題ではない。

とにかく、もう一緒にお風呂に入る事だ嫌だったのだ。

『なるほど。もうお年ごろなのか』

もう、ではなく。既にお年頃だ。

●

赤飯だ。

夕飯に赤飯が出た。

兄の手作りであった。

「もう生理は終わってますけど？」

「お風呂卒業の記念」

それは私の記念ではないはずだ。

「全く、いつになったら妹離れしてくれますの？」

絶望した顔。

だが、私としては正論を言っただけだ。

まあ、裸の付き合い以外なら認めてもいい。

「今夜は一緒に寝ようねー」

「イヤですわ」

落胆という言葉がコレほど似合う人物は初めて見た。

「お兄様は中学生なのですからそろそろ彼女の一人くらい作って下さい」

「黒ちゃん以上に好みの子がいたらその時は考慮しよう」

駄目だ。この兄。早く何とかしないと。

「高校生までにはシスコン卒業してくださいね？」

それから数年後。

高校生になった兄と中学生になった私の関係は今まで通りである。互いに寮暮らしになった。

しかし、仲の良さは変わらなかった。

互いの人生で数カ月間も顔を合わせることがなかった期間があったにも関わらず、出会った時はいつも通り。これが家族というものののだろうか。

●

「中学生になったからってこんな下着、お兄ちゃんは認めません！」
「そう言われても既に穿いてますわ。それに能力使用に関わってく
るので履き心地優先ですわ」

ランジェリーショップに兄妹で訪れるという事に何の抵抗もないのは私が変わっているからだろうか？
久しぶりの兄妹揃っての買い物に少なからず気分が良くなっていたのかもしれない。

それにしても、女性の扱いに慣れてますわね。
兄との買い物で気付いた事だ。

さり気なく荷物を持ったり、道路の車道側を歩いたり、細かな所に
気を使っていた。

「お兄様、こういった所は彼女と来るのがいいのでは？」

「ん？ 彼女なんていないぞ。まあ、高校で友人は何人かできたな。
そいつらはバカだけど面白い奴らだよ」

何気に彼女が居るのか聞いたがいなかった。

そもそも、彼女ができたらまっ先に知らせに来るだろうな。この兄
は。

それより、友人が出来たという事はいいことだと思っ。
互いの学生生活の話するのは初めてだ。

「常盤台ってお嬢様学校じゃなかったっけ？」

「まあ、学内ではそこらへんの子中学生と変わりませんわね。世間知らずのお嬢様も何人かいますけど」

学生生活の話から風紀委員ジャッジメントの話。それから能力の話。色々話したかった。

しかし、時間が足りなかった。別れの時間である。

家族であると同時に学園都市の生徒である以上、下校時刻がある。

「おっと、今日はこれまで。また今度にしようね」

あっさりと別れを告げられた。

「え、ええ。また今度ですわね」

その、また今度が次の日であるとは思っていなかった。

●

とある日のとある家族のやりとり。

●
配点：（家族）

●

サブタイトル通り。

気付いたら20万PV突破していました。

初めて見て思ったのは黒子の人気。

驚いたのがランキング入ったこと。

感想は嬉しいものだ。

あと、鋭い人に気付かれた。

主人公の能力は幽白の戸愚呂兄弟を足したものです。

女体化↓戸愚呂兄

筋力操作↓戸愚呂弟

って感じです。

アイツらは妖怪だからな！

強さまで同じじゃないよ！

強さに関しては結構チートっぽいですがあくまで対人レベルで強いだけです。

銃で撃たれば普通に傷つきます。

毒ガスを撒かれれば死にます。

物量で攻められれば栄養切れで倒れます。

そんな感じで今後もこのSSをよろしく。

あと、作者からの問。

やっぱ、レベルアップ事件までやったほうがいい？

一応書いてますがここいらで終わってもいい気がした。

あと次作候補

・恋姫†無双

（オリ主、どつかの武将で、恋姫†無双の住人。文武両道でDM）

・f a t e s t a y n i g h t

（オリ主、アサシンのマスター。アサシンはハサン。マスターはあるSSと同系で身体強化系に特化した魔術師）

・とある魔術の禁書目録へ介入

（そのまんま。上条当麻君と事件解決とフラグ建設）

・リリカルなのはシリーズ

（オリ主、ストライカーズからスタート。なのは一筋のはずが他の娘に逆レイプされるほど好かれる。レアスキル魔力供給持ち。それ以外は並レベル）

・ゼロの使い魔

（オリ主、貴族からスタート。ゲルマニア所属でキュルケと顔見知り程度。土のトライアングルレベル。二つ名「武器庫」）

など考え中。

全部エロ含むよw

是非コレで！ という方は感想か活動報告のコメントに書きこんで下さい。

作者的にはゼロ魔かなあ。以前ゼロ魔SSで挫折したからリベンジしたい。

20万PV突破とこれまでの感謝（後書き）

誤字修正

能力使用関わって

能力使用に関わって

閑話 01 次作の話とか（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

閑話01 次作の話とか

アンケート実施

●

前回の次作候補の話

少し詳細を記載

・恋姫＋無双

概要

オリ主、どっかの武将で、恋姫＋無双の住人。文武両道でドM。関羽程度の武に桂花程度の文は持っています。

登場人物を知らない人用。武力90知力80って感じです。

二槍の槍使い。趙雲子龍の兄。泣きホクロが印象的な槍使い。

一応、血の繋がりの無い義兄妹です。

(Fate zeroのランサーじゃね？って言うな！)

・fate stay night

概要

オリ主、アサシンのマスター。アサシンはハサン。マスターはとあるSSと同系で身体強化系に特化した魔術師。

ハサンはfateゼロのアサシンですが、fate stay nightの方でハサンを召喚って感じですよ。

身体性能は全盛期の言峰と同じ位でチートです。

ダーク系です。結構人が死んでいきます。切嗣並の非情さを持ち合わせています。

卑怯、卑劣は褒め言葉というキャラ。

・とある魔術の禁書目録へ介入
概要

そのまんま。上条当麻君と事件解決とフラグ建設。
上条当麻の記憶がなくなるところまでやる予定。
基本的に原作の流れで話は進みます。

上条当麻のサポートキャラ的な位置づけ。
フラグキャラ。

インデックス、神崎、委員長、御坂美琴、黒子の予定です。
友人フラグ
ステイルマグヌス、土御門

・リリカルなのはシリーズ
概要

オリ主、ストライカーズからスタート。
なのは一筋の娘が他の娘に逆レイプされるほど好かれる。

レアスキル魔力供給持ち。それ以外は並レベル
保有魔力量はランクSSだが、出力が下手。

その為、総合ランクがAランク程度。
攻撃力は並。

ユーノ・スクライアの友人で管理局員。
なのは達とは訓練で同期になって顔見知り。 同い年でその頃から仲
がいい。

・ゼロの使い魔
概要

オリ主、貴族からスタート。
ゲルマニア所属でキュルケと顔見知り程度。 土のトライアングルレ
ベル。二つ名「武器庫」

成り上がり貴族。 平民と仲がいい。
土系統のトライアングルで戦争用の兵器、 武器を作って売る武器商

人という顔を持っている。

戦略、戦術は高レベルであり、自身も武器の扱いに長けてる。貴族らしくない人柄。相手が杖を持つのなら機関銃を持って対抗する卑劣な人物である。

遠距離からの狙撃方法を確立している立派なメイジ殺し。

トリステインの学校に行ったのはちよつと殺しが過ぎてほとぼりが冷めるまでの冷却期間とゲルマニア皇帝の勅命の諜報活動のため。

やはりとある禁書への介入が多い。

次になのはかゼロ魔が同等くらい。

その次に恋姫とFate。

禁書への介入の意見が多いです。

なので、次回、禁書への介入を書いたものを投稿。

反応を見てダメそうだったらIFストーリーとして禁書を開始。

本筋であるとある科学の超電磁砲のレベルアップまで書いて終了という流れ。

イケそうだったらそのまま禁書に突入。

とある科学の超電磁砲の方はここで終了という流れになります。

クリスマス明けの月曜日までアンケート取ります。

紹介した次作はどれがいいですか？

1：恋姫†無双

2：fate stay night

3：とある魔術の禁書目録へ介入

4：リリカルなのはシリーズ

5：ゼロの使い魔

番号でもいいので感想、報告のコメント欄に書きこんで下さい。

閑話 01 次作の話とか（後書き）

恋姫の概要に追加。
兄だが義兄妹。

第十章 終わりの始まり兄と友人（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第十章 終わりの始まり兄と友人

●

夏休み。

それに伴う停電。

とある不幸な高校生は出会いがあり、その物語の開演が待ち構えていた。

科学とは異なる魔術の世界に足を踏み入れる事になる。

科学と魔術が交差し、不幸な主人公の物語は始まるのだ。

●

もう一人の主人公である白井紅太の元に妹から連絡が入った。

虚空爆破事件の犯人の少年が意識不明になり病院に搬送されたという知らせであった。

容態は謎の意識不明が続いている状態で、身体のどこにも異常がない。

ただ、意識だけが失われている状態で原因不明で手の打ちようがないという物だ。

それがある日を境に同じ病状の患者が次々と現れていると医者は言った。

レベルアップ
幻想御手事件絡みだという予測に情報不足で判断がつかないと白井黒子は思った。

そして、病院で脳生理学の専門チームの一人。
木山春生と出会う事になる。

「全員そろった所で改めて自己紹介しておこう」

木山春生の周囲。

白井黒子と御坂美琴と白井紅太がおり、その三人に向かって木山春生が発言する。

「私は木山春生。 大脳生理学を研究している。 専攻はA I M拡散力場。 能力者が無自覚に周囲に放出している力の事だ」

木山春生は制服を見て判断する。

常盤台の制服だ。 ならば、説明は省いても問題ないだろう。

常盤台の制服に風紀委員の腕章をしている少女の血縁関係が顔から推測できる男にも特に説明はいらないだろうと思う。
分かなければ後で聞けばいい。

「私は風紀委員の白井黒子です」
ジャッジメント

「白井黒子の兄です。 白井紅太だ」

「御坂美琴です」

やはり血縁関係だったか。 似た顔をした兄妹だな。
ん？

ミサカ……。

ああ、レベル5の。

「君が御坂美琴か」

「知ってるのか？」

白井兄が言葉を挟む。

なるほど、この中で主権を握るのは彼か。

「ああ、レベル5ともなると有名人だからね」

もう一つ、思い出した。

ボディコントロール

身体操作の白井紅太。

メタモルフォーゼ

肉体変化は学園都市の中に僅か3人しか存在しない。

メタモルフォーゼ

その肉体変化よりさらに稀少な能力者だ。

容姿の変化から人間の体内にある物質まで操作出来ると聞く。

詳しくは知らないのだが、能力のデータは研究者の一部では有名だったはずだ。

「そして、君。白井紅太。学園都市に一人しかいない稀少^{レア}な能力者

……」

「はあ!?!」

御坂美琴は知らなかったようだ。

余計な事を口走ったか。

まあまあとだめている白井兄とだめられている御坂美琴を放っておいていいだろう。

「あの……、それで何かわかったでしょうか?」

医院長が私に向かって問いかけてきた。

「今の所は何とも言えません。データを持ち帰って研究所で精査するつもりです」

データなら送る事も出来ただの、ご足労かけたのだどうでも良い建前だ。

医院長とのやり取りが済んだ所で白井妹が尋ねてきた。

レベルアップ

「幻想御手についてお尋ねしたいことがあるのですが」

「レベルアップ
幻想御手？」

それはネット上で広まっている能力をレベルアップさせる道具だという。

「それはどういったシステムなんだ？」

「それはまだわかりませんの」

「形状は？ どうやって使う？」

「わかりませんの」

まだ存在すら確認されていないのか。
ならば答えは、

「それでは何とも言えないな」

しかし暑いな。脱ぐ。

「ふう……、暑い」

「おお。ナイス……。っ痛っ！ 黒ちゃん、蹴るなよ。美琴も殴るなよなあ」

「何をマジマジと見ているのですかお兄様！ 何をイキナリストリップしてますのっ！ 貴女は！」

「いや、だって暑いだろう？」

暑いなら脱ぐだろう。

それがこの暑さを回避するための行為であり、別段見られても気にすることはないはずだ。

「アンタは向こう向きなさい！」

「美琴、君にも希望はあるよ」

●

病院近くのファミレス。

冷房が効いており涼しい。

白井紅太は熟考する。

大人の女性のバストはスバラシイものだ。

妹もいいがたまには違うタイプの女性もいいと思う。

なるほど、無い物ねだりだ。

周りに美少女が多いが美女の大人の女性は初めてだと思う。

木山春生。

都市伝説の脱ぎ女だ。

黒の下着がなかなか似合う人物だ。

「つまり、ネット上での噂。^{レヘルアップバー}幻想御手なる物があり、君達はそれが昏睡した学生達に関係しているのではないか。そう考えているわけだ」

理論的であり、クールビューティーという言葉が似合いそうだ。

これは、上条当麻の好みだろうなあ。

恐らく、道を聞かれたり探しものがあると、この人が困っていれば確実に手伝うはずだ。

●

木山春生との話合いは乱入してきた初春飾利と佐天涙子を含めてつつがなく終了した。

途中、佐天涙子のこぼしたジュースがストッキングにかかってその場で脱ぐというハプニングがあったものの、^{レヘルアップバー}幻想御手が見つかり次第、木山春生に調査の協力を取り付けれたのだ。

そして、その帰り道。
主人公の運命は交差する。

「あ、紅太と、ビリビリかあ」

「ビリビリ言うな！ あとねえ、あからさまに私の方を見て残念そうな顔をするな！」

親しい友と、毎度イチャモンを付けて勝負を仕掛けてくる女。
どちらが嬉しかと問われれば前者である。

「こんな所でどうした？ 不幸。確か補習だったはずだろ？」

「ああ、その帰りだ。ちよつと英国式の教会を探しててさあ。知らない？」

「何？ アンタ十字教徒だったの？」

ビリビリは放って置いていいのだろうか？

「いや、忘れ物を届けに行かないとなんねーかもだからさ」

「また、不幸に巻き込まれようとしてるのか？ まあいい。ソコなら俺が知ってるから連れていってやろう」

重畳という言葉はこういった時に使うのだろう。

「サンキュー。じゃあ、行こうぜ」

紅太に付いて行く様に足を向ける。

「って、コルア！ 私を無視してんじゃないわよお。アンタ達！」

電撃が走り周囲の電化製品が不具合を発した。

「おい、不幸。オマエのせいじゃね？」

「いやいや、このビリビリのせいですよ?! どう考えても!」

壊れた電化製品の弁償という末路が見える。
ならば、

「取り敢えず、逃げろおおお」

走った。遁走だ。

一体120万円する警備ロボの故障など見ていない!

●

不幸絶好調だな。

見るに見かねて付いてきたが、やはりコイツは不幸だ。
聞くと昨日も御坂美琴に絡まれたらしい。

その決着を今つけようと御坂美琴に言い寄られていた。
だが、上条当麻の脅しに御坂美琴はビビった。

マジメにやってもいいのかよと、脅す顔と低めの声で脅したのだ。

「不幸だ。朝は自称魔術師^{エセ}。夕方はビリビリときたもんだ」

夏休み初日から不幸だな。

朝に魔術師ってか。

「まっ、まじゅつして……、何？」

美琴……。心が折れたな。

● 交わることのなかったはずの運命は神の意志で交差する。

● 配点：（介入）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3935z/>

とある白井黒子の兄

2011年12月23日12時04分発行